

世界に誇れる極上の会津米づくり「目指そう 今年も特A 会津コシ1等米100%」

両沼地方稲作情報 第5号

令和2年7月3日

発行： 福島県会津農林事務所会津坂下農業普及所 (電話0242-83-2112)
" 金山普及所 (電話0241-54-2801)
JA会津よつば 各営農経済センター、(有)カネダイ、(有)猪俣徳一商店
(有)山一米穀店、会津宮川土地改良区、阿賀川土地改良区、会津坂下町只見川土地改良区

☆ 水稻の生育は平年に比べ2、3日進んでおり、草丈がやや長く、葉色がやや濃いです。穂肥は生育状況をみて慎重に判断しましょう。基肥一発肥料を使用した場合は基本的に不要です。

☆ 良質米生産に向け、カメムシ類対策を徹底しましょう。出穂前の草刈り作業は出穂10日前には終わらしましょう。

1 気象情報(仙台管区気象台発表「東北地方1か月予報」令和2年7月2日発表より抜粋) <7月4日から8月3日までの天候見通し>

東北日本海側では、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、東北日本海側で多い確率50%です。日照時間は、東北日本海側で平年並または少ない確率ともに40%です。

2 生育状況(農業総合センター 会津地域研究所)

6月30日の生育調査の結果、草丈は平年比108~112%程度で長くなっています。茎数は平年比94~103%程度で平年並みです。葉齢は平年差0.3~0.5程度で多くなっています。葉色は平年差0.2~0.9でやや濃くなっています。

表1 農業総合センター会津地域研究所 水稻作柄概況(6月30日調査 5月20日移植)

品種名	草丈(cm)			茎数(本/m ²)			葉齢(葉)			葉色(SPAD値)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差
コシヒカリ	56.3	50.3	112%	734	714	103%	10.3	10.0	0.3	39.6	39.4	0.2
ひとめぼれ	56.0	50.8	110%	735	783	94%	10.5	10.0	0.5	43.5	42.6	0.9
天のつづ	55.4	51.1	108%	647	686	94%	9.8	9.5	0.3	44.1	43.8	0.3

3 当面の技術対策

(1)水管理(中干し~幼穂形成期~穂ばらみ期(減数分裂期)~出穂期)

ア 中干しは、幼穂形成期に支障が出ないように早目に終了しましょう。

イ 中干し後は、間断灌がいを行い根を健全に保ちます。低温(平均気温20℃以下、最低気温17℃以下)の場合は、深水管理(水深10cm)し、幼穂を低温から守りましょう。

ウ 出穂期前後の10日間は花水(稲の花が咲く時期の水)が必要です。徐々に湛水管理としましょう。その後は、間断灌がいとし、出穂後30日まで水を切らさないようにしましょう。

(2)高温対策

登熟期前半(出穂後20日間程度)に高温が続くと、白未熟粒等の品質低下が懸念されます。高温が続く場合は、地域の水量を考慮し、湛水管理や飽水管理(ひたひた水状態)などで地温を抑制しましょう。

表2 農業総合センター会津地域研究所 幼穂形成期と出穂期の平年値(5月20日移植)

品種名	幼穂形成期	出穂期
コシヒカリ	7月15日	8月4日
ひとめぼれ	7月8日	7月30日
天のつぶ	7月11日	8月1日

4 穂肥(出穂 25 日前の生育で判断します。基肥一発肥料の場合は原則必要ありません)

- ア 幼穂長により出穂前日数を確認します(表3)。出穂 25 日前に稲の生育を確認し(表4)、草丈が長く葉色の濃いほ場は、穂肥の量を減らすか時期を少し遅らせましょう。
- イ ひとめぼれ、天のつぶは、**出穂 25 日前にチツソ成分 2kg/10a** を基本とします。
- ウ コシヒカリは倒伏しやすいので、施肥時期を遅らせ、**出穂 15 日前にチツソ成分 1.5～2kg/10a** を基本とします。
- エ 基肥一発肥料を使用している場合、基肥に穂肥分を含んでいるので極端に葉色が低下しているほ場を除き、穂肥は必要ありません。

表3 幼穂長と出穂前日数の目安

幼穂長	0.1 cm	0.2 cm	1 cm	2 cm	8 cm
出穂前日数	25 日	21 日	18 日	15 日	12 日

表4 幼穂形成期(出穂 25 日前)の標準的生育

品種名	草丈	葉色(カラスケール)
コシヒカリ	65～70 cm	3.0～3.5
ひとめぼれ	60～65 cm	3.5～4.0

5 病虫害防除

(1)いもち病対策

- ア 葉いもちが発生した場合は直ちに薬剤防除(散布剤)を行いましょう。
- イ 穂いもち防除の基本は予防です。水面施用剤を使用する場合、出穂前に適期に散布しましょう。散布剤を使用する場合は、穂ばらみ末期と穂揃い期の2回散布しましょう。

(2)紋枯病

土壌で越冬した菌核が感染源で 30℃以上の高温を好むため下葉から枯れ上がってくる特徴があります。前年発生ほ場で多発が懸念される場合は薬剤防除しましょう。

(3)稲こうじ病

穂ばらみ期が低温日照不足で、降雨の多い年に発生が多く、窒素の多用あるいは遅い窒素追肥で発生が助長されます。常発地帯または天気予報などで穂ばらみ期の降雨が予想される場合は薬剤散布してください。なお、葉の濡れている場合は薬害が出やすいので注意してください。

(4)カメムシ防除

- ア 出穂間際の畦畔草刈りはカメムシをほ場へ追い込むことになるので、出穂10日前には草刈り作業を終えましょう。地域全体で斑点米カメムシ類の密度を抑制することが重要です。
- イ 薬剤防除の場合、散布剤では乳熟期(出穂後 7～10 日)の防除を基本とし、その後発生が予想される場合は 7 日おきに追加防除しましょう。粒剤(水面施用剤)では穂揃期～乳熟期を目安に散布し、使用時期や止め水期間(7 日)に留意しましょう。

○薬剤の種類によっては本紙に記載した使用時期と異なる場合があります。使用する際は必ず包装や容器のラベルを確認し、記載事項を守って正しく使用してください。

○今年の夏も高温が予想されますので、水分補給をしっかり行い、熱中症にご注意ください。

今後の用水について

◆今後の天候次第では温水になるおそれがありますので、節水にご協力ください。
また、畦畔を点検し漏水防止に努めましょう。

次号は 9 月 4 日
頃発行予定です。